



Title	Occupational sedentary behavior and prediction of proteinuria in young to middle-aged adults : a retrospective cohort study
Author(s)	藤井, 良幸
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/81904
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨
Synopsis of Thesis

氏 名 Name	藤井 良幸
論文題名 Title	Occupational sedentary behavior and prediction of proteinuria in young to middle-aged adults: a retrospective cohort study (座位のワークスタイルと蛋白尿 一後ろ向きコホート研究一)
論文内容の要旨	
〔目 的(Purpose)〕 長時間の座位は、メタボリック症候群、糖尿病、心血管系疾患などの生活習慣病および死亡のリスクであることが報告されていたが、腎臓に及ぼす影響は不明であった。本研究の目的は、座位のワークスタイルが、蛋白尿の発症に及ぼす影響を明らかにすることである。	
〔方法ならびに成績(Methods/Results)〕 2006～2018年度の大阪大学職員の定期健康診断データを利用した後ろ向きコホート研究を行った。初回健診受診時に主な就業形態を「座位」と回答したデスクワークの男性3,449人では、中央値4.8年の追跡期間において、452人（13.1%）が蛋白尿（尿蛋白 $\geq$ 1+）を発症した。一方、「立位」、「歩行」、「物を運ぶ」あるいは「重労働」と回答した男性1,538人のうち145人（9.4%）が蛋白尿を発症した。多変量Cox比例ハザードモデルを用いた解析の結果、「座位」の蛋白尿のリスクが1.35倍（95%信頼区間1.11–1.63）上昇していることが明らかになった。なお、女性では座位と蛋白尿の関連は認められなかった。	
〔総 括(Conclusion)〕 本研究成果により、座位のワークスタイルが蛋白尿発症のリスクであることが明らかになった。就業中の座位時間の短縮が、腎臓病を予防し、増加の一途を辿る透析患者数の抑制に繋がる事が期待される。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

(申請者氏名) 藤井 良幸			
論文審査担当者		(職)	氏 名
	主 査	大阪大学教授	猪 阪 孝 隆
	副 査	大阪大学教授	梶 本 真 実
	副 査	大阪大学教授	磯 博 康

論文審査の結果の要旨

近年増加の一途を辿る透析患者を減少させるためには、蛋白尿と腎機能低下で特徴づけられる慢性腎臓病の予防策を確立する必要があり、肥満、喫煙等の改善可能な生活習慣リスクを同定することが重要です。長時間の座位は、メタボリック症候群、糖尿病、心血管系疾患などの生活習慣病および死亡のリスクであることが報告されていますが、腎臓に及ぼす影響は不明でした。

本研究では、大阪大学職員10,212人の定期健康診断データを利用して、「主な就業形態」を「座位」と回答したデスクワーク主体の男性3,449人は、それ以外の男性1,538人よりも、蛋白尿の発症リスクが1.35倍上昇していることを明らかにしました。この結果は、職場での長時間の座位が蛋白尿のリスクであることを示しており、就業中の座位時間の短縮が腎臓病の予防に繋がることが期待されます。

博士（医学）の学位授与に値するものと認める。